

春の鹿幻を見て立ちにけり

藤田湘子

角の立派な大きな鹿。一見穏やかにも、物憂い感じにも見える。美しい立姿で微動だにせず、遠くを眺めている。ざわめきを忘れさせてくれるような、静かな景を想像した。

湘子自註によれば「へ春憂しと角ある鹿はたたかへり」も一緒に出来た。これも奈良へ行くたびにとらえたさまざまな鹿の姿態の記憶の蓄積が、うまく醜酔してくれたもの。」とある。そして、同年に「亡き師ともたたかふこころ寒の入」の句もある。詰まるどころ、幻を見て立っていたのは湘子自身であり、「春の鹿」は、奈良でたびたび出会った鹿との交感が生んだ、作者自身を投影したものだろう。

1998年（H10）作 第十句集『神楽』 鑑賞・野本京